

臨床に活かす病理診断学 第2版 消化管・肝胆膵編

福岡敬宜, 二村 聡 編

＜書評者＞ 高田忠敬 (帝京大学附属病院名誉・客員教授・
肝胆膵外科学/日本肝胆膵外科学会理事長)

このたび、医学書院から出版された『臨床に活かす病理診断学 第2版——消化管・肝胆膵編』（編集：福岡敬宜・二村 聡）の書評を依頼されました。

私は、雑誌『胆と膵』の編集委員長をしている関係で、委員の1人である福岡敬宜先生とは親しい関係にあります。私が福岡敬宜先生に異才を感じたのは、彼が雑誌『胆と膵』に繰り出してくる企画に対してです。

それらの企画を紹介しようと、まず、「ぼくは病理学研修生—診断ときどきリサーチ」を6回（前編、後編と二部作）掲載しました。これはいわばQ & A方式で、標本の整理、染色、診断などから研究の展開まで幅広く読者に身近に感じられる病理を紹介したものです。臨床医として大変興味深く、“なるほど”とうなずきながら読ませていただきました。

次に、インタビュー「その『道』の究め方—消化器病に挑み続ける先駆者たち」が16回掲載されました。さらに、現在も続いているインタビュー「その『世界』の描き方」があります。

これらの企画では、インタビューの福岡敬宜先生の多大の努力とともに、先人たちから“旨み”を引き出す能力の高さに感心しました。インタビューを受ける先人

たちが、素直に研究の苦しみ、目的に到達したときの喜び、人生観などをよどみなく話しているのを読み、遠くに感じていた先人たちがすっと近づいてきたのを感じさせられました。

このような背景を基に、今回、福岡敬宜・二村 聡編集による『臨床に活かす病理診断学 第2版——消化管・肝胆膵編』（以下、本書）を読んでみました。消化器病に携わる医師にとっては、最低限知らなくてはならない臨床病理のテキストブックだと感心しました。

実は、私は、病理学についてはまったくの素人ではありません。東京女子医科大学消化器病センターの外科レジデント（医療練士）の6年の間には一時期病理部門に配属され、標本整理などを行いましたが、レジデントが終了してから1年間、東京女子医科大学第一病理学教室に助手として入局し勉強しました。本書の入門編や基礎編に書かれているようなことを実際に行ってきたわけですが、問題は、当時は、ガイドをするような良い参考書がなかったもので、先輩や教授に、あるいは、技師たちに直接教わって、検体の固定、切り出し、染色、検鏡などをたどどしく行っていました。また、学生の病理実習では、検鏡でわから

ないところを私に聞いてくるのですが、まだ勉強していないところも多く、たびたび、恥をかくことがありました。

本書は、学生時代のレベルの低い知識や経験、医師になってからのうろ覚えの知識に対して、入門者が勉強し、身につけやすいQ & A方式を基本的に採用しており、注釈も簡潔でわかりやすくなっています。消化器病医（内・外科を問わず）と病理医とのやりとりだけでなく、カンファランスや学会での発表のみならず、討論のベースをつくる知識を得ることができます。また、ちょっとわからない病理用語などについては辞書代わりにこのテキストを見ればよく理解できます。

また、「ここがホット」や「耳より」は、ちょっと読んでおくと少し偉くなったような感じを与えてくれます。念のため、「臨床と病理の架け橋」については、一読されることをお勧めします。

本書は、病理学的事項をやさしく記載した入門書であるとともに、著者たちが実際に学会や委員会などに臨むときに、“ちょこっと”走り読みして、部外者にもわかりやすく説明できるように考えて企画したのではないかと考えてしまいました。それほど使い勝手がいいテキストだと感心しています。

●B5 頁300 2011年
定価8,925円
(本体8,500円+税5%)
[ISBN978-4-260-01095-5]
医学書院刊